vol.04
2023.9.18

家庭科教育研究所 ニュースレター

目次

刊行に寄せて …… P.1
お知らせ …… P.2
ひろば …… P.2 - 3
会員からのひとこと …… P.3 - 9
編集後記 …… P.9

今年は猛暑が続きました。
ようやく、朝夕に、新しい季節の訪れを告げる虫の音が聞こえるようになりました。
少しほっとします。

研究所ニュース Vol.4 をお届けします。
「お知らせ」欄には、第 5 回勉強会のご案内を掲載しました。
今回は、シリーズ「世界の家庭科の今」の 2 回目として、フィリピンの家庭科教育についてお話しいただきます。
6 月には、シリーズ第 1 回、シンガポールの家庭科についての勉強会を開催しました。教育とはまさにそれぞれの社会の中に息づいているものなんだなぁということを改めて実感させられる内容でした。シンガポールの家庭科は、義務教育 10 年間の後半に位置する中等教育課程におかれており、前期中等教育（13-14 歳）では Food and Consumer Education (FCE) を必修科目として、後期中等教育（15 歳 -16・17 歳）では Nutrition and Food Science を選択科目として学んでいます。人口 500 万人、世帯数 137 万、国土面積東京 23 区くらいと、とても小さく、農地はそのわずか 2% だけ、天然資源をもたないシンガポールで、社会の重要課題である持続可能性の実現、持続可能なライフスタイルの探求・実践を家庭科の重要な学習課題としているということでした。
さて、フィリピンの家庭科教育はどのようなものなのでしょうか。後期が始まり、学校行事も多いこの時期お忙しいことと存じますが、9 月 23 日（土）午後 4 時からの勉強会にみなさまのご参加をお待ちしています。

このニュースを配信している今日は、敬老の日です。それにちなんだ内容の号をお届けしたいと会員のみなさんに記事の執筆をお願いしました。
「ひろば」には、上村協子氏から「天野正子『〈老いがい〉の時代ー日本映画に読む』（2014 年岩波新書）を家庭科授業で活かす」を寄稿していただきました。示唆に富んだ内容をお楽しみください。そして、「会員からのひとこと」欄には、「わたしと祖父母」というテーマでの寄稿を会員名簿のア行のみなさまにお願いしました。優しい、暖かい、懐かしいエピソードがちりばめられた印象深い特集になりました。寄稿して下さったみなさま、ありがとうございました。

お知らせ

各国から講師をオンラインでお招きし、その国の家庭科についてお話しいただく連続講座
“世界の家庭科教育のいま”　2 回目のお知らせです。
今回はフィリピンの家庭科についてお話しいただきます。zoom 情報は追ってお知らせします。

家庭科教育研究所第 5 回勉強会
日時：2023 年 9 月 23 日（土）16:00 ～ 17:30
場所：オンライン
テーマ：Home Economics Education in Philippines
講師：Mr. Albert Mojica Rosarda
President of Philippines Home Economics Association
President of ARAHE（Asian Region Association for Home Economics）

ひろば

天野正子『〈老いがい〉の時代ー日本映画に読む』（2014 年岩波新書）を家庭科授業で活かす

（一社）現代生活学研究所　上村協子

日本映画を家庭科授業に取り入れて「老い」を捉えることには、どんな効果があるだろう。おばあちゃん子・おじいちゃん子という区分があれば、私はおじいちゃん子だと認識しているが本書の著者、天野正子（以後正子）は、どちらだろう。そんなことを考えながら本書を読んでみた。

正子が注目した〈老いがい〉というユニークな本書の題名は池谷薫監督ドキュメンタリー『先祖になる』（2013）から生まれた。東日本大震災から 39 日目。2011 年 4 月津波被害が大きかったまち岩手県陸前高田市気仙町の朝、吐く息はまだ白い。60 年以上きこりとして働いてきた佐藤直志 77 歳。消防団員の息子は津波にのまれ、自分が建てた家も水につかった。「山に帰る」人が亡くなることを、彼はそう表現する。「仮設住宅から山に帰りたくない。先祖が生きてきた元の土地に家を立て直し、自分が先祖になる」カメラは、佐藤の 1 年半を追う。その映像を見て正子の脳裏には「生きがい」でも「死にがい」でもない〈老いがい〉という言葉が浮かんだという。

さて日本映画が 64 作品以上（写真付き 29 作品）が登場する本書では、さまざまな老いや死が描かれる。たとえば、葬儀の際の遺体を扱う納棺師を描いた『おくりびと』（2008）、「痴」がひらく世界『ペコロスの母に会いに行く』（2013）。読み進めるうちに、「われ考えるゆえにわれあり」ではなく、老いのもう一つの時間軸である「われ感ずるゆえにわれあり」の重要性に気づかされる。家族や介護をテーマとする授業などで紹介すれば、人生のどこかで生徒が想い起してくれそうな映画が解説されている。

家庭科で注目してほしいと私が個人的に願っているのは「生ー老ー死」をつなぐ視点である。センス・オブ・ワンダー、子どもがもつ神秘さや不可思議さに開かれた感性を指摘したのは沈黙の春のレイチェル・カーソンであるが、子どものセンス・オブ・ワンダーを分かち合える大人は、現役の大人ではなく、まもなく彼岸へと旅立つ老人ではないかと正子はいう。「子どもー老人」連合が主題となる映画として、大林宣彦監督『水の旅人 KIDS』（1993）『あの、夏の日とんでろじいちゃん』（1999）相米慎二監督『夏の庭 The Friends』（1994）などがあげられている。

2023 年現在の日本では、相続の関係で子どもや孫に、生前贈与を考えるおじいさん・おばあさんが増えているけれど、コロナの影響で孫やひ孫たちが自分は「おじいちゃん子」「おばあちゃん子」だと認識するほど、世代間でメッセージを伝えあう機会は減っているのではないか。そこを何とか変えられないか。

家庭科授業への活用を考える前に、まずは「おばあちゃん子」だった天野正子先生の日本映画にみる老い、あなた自身の〈老いがい〉を考えながら読んでみて欲しい。

会員からのひとこと

私の祖父母との思い出

会員番号 No1　安部明美

私は、祖父母、両親、甥、弟、妹と同居していました。大家族の中で、祖母は、賢い人でした。私が小学生のころ（1960 年代）、母に頼まれて、近くの雑貨屋さんに買い物に行き、帰宅後に祖母の前で買ったものを見せました。祖母に「買ったものの値段を言いなさい。」と言われ、〇〇円と●●円と・・・と次々に買ったものの値段をいうと「合計は◎◎だね。」と購入金額をピタリとあててくれました。子どもながらに「何で分かるのだろう？」と不思議に思いました。また、祖母からのおつかいで「お母さんに頼んで、1 万円札をもらい、八百屋に行って、もやしを 10 円分買ってきなさい。」と言われました。当時の 1 万円札は大金です。小学生が持つようなお金ではありませんでした。祖母に言われるまま、八百屋さんに行って、「もやし 10 円分ください。」といい、1 万円札を渡すと、八百屋さんは、「明美ちゃん、ただでいいよ。」と言ってくれました。馴染みの客だったかどうか、定かではありませんが、祖母は、八百屋さんが、お釣りの 9,990 円を用意するのは面倒だから、ただで良いと予測していたかもしれません。

一方、祖父は、穏やかですが、大酒のみで、外で仕事をしていた記憶が全くありません。私の生まれ故郷の山梨では、ワインと言わずに葡萄酒といい、祖父は、毎晩、晩酌に葡萄酒を飲んでいました。祖父は、周りのことはお構いなく、真っ赤な顔をして、のんびりと 3 日で一升の葡萄酒を飲んでいました。当時、貧乏だったので、祖父の酒代は、家計を圧迫していました。祖父は、日中、和裁をしていました。いつも部屋の中で、チクチクと何やら縫っていたことを思い出します。冬になると皆の半纏を手縫いしてくれました。なぜ、祖父が、いつも裁縫していたのかを不思議に思っていました。

これらのエピソードは、祖父母との思い出のほんの一端です。この他にも思い出がいっぱいあります。私も、5 人の孫たちと共にたくさんの思い出を創っていきたいです。

高齢者に関する学習についても述べてみたいと思います。私は、2023 年 3 月まで高校 2 年「家庭基礎」を担当し、その授業の中で、危ない間取りという書籍を資料としていました。特に興味深い内容が、独房と化したお年寄りの部屋[1]でした。その内容は、以下の通りです。

祖母と両親、子どもの 5 人家族の家は、築 30 年以上経ち、老朽化したために増改築をした。それまでの家は、平屋の田の字型住宅で、家族はいつも茶の間に集まり、隣のおばあちゃんの部屋には子どもがいつも出入りし、一緒に遊んだりお話を聞いたりしていた。増改築後は、おばあちゃんの部屋は、二階の太陽光が当たる一番環境のいい位置にした。ところが、子どもたちは一階のリビングルームに集まって二階のおばあちゃんの部屋に行かなくなり、また、おばあちゃんも二階の自室から一階のリビングルームへは、足が遠のいてしまった。
やがておばあちゃんは、部屋に引き篭もりがちに。徐々にボケが始まり、遂には寝たきりになって、二年後に亡くなってしまった。

この資料を読んだ生徒の感想を一部紹介します。

とても辛い話だった。私の祖父母も家のリフォームを考えているところだったので、この話を読んでゾッとした。家の間取りを考えるのはとても難しいことだと知れたので、この話をしっかりと伝えたい。また、一軒家よりもマンションの方が住む上で快適なのではないかと考えた。自分の将来の家について、ゆっくり、しっかり考えていきたい。

今回は、住生活分野ですが、私は、衣食住すべての単元で、高齢者について触れることが重要であると考えています。人は誰しも年老いていき、高齢者になるでしょう。高齢者について知り、学び合うことは、自分の将来や人の未来を考えることに繋がります。

そこで、高齢者を語るときには、自分事でも、他人事でもない、「共事者」[2]になることを心がけたいと思っています。

1. 横山彰人 . 危ない間取り．新潮社 .p105-108
2. 小松理虔
https://news.yahoo.co.jp/articles/0d82bc46ce4727fbbad75ae7a5ffc7b6b2f707af?page=1（閲覧　2023.9.12）

わたしと祖父母

有友愛子

父の仕事の都合で日本各地を転々とする暮らしだったため祖父母と同居したことがない。
幼少期、夏休みと冬休みに両親の実家の香川に滞在していた時間が私にとっての祖父母との時間だ。

今は父方の祖母にしか会うことができない。
この夏に会った父方の祖母は視力や聴力が低下し、なんとか私であることを伝えることができた。
面会の時間、祖母とずっと手を握っていた。

時々うとうとするけれど、ふと力強く握り返してくれ、しあわせ、しあわせと繰り返し言ってくれた。

父方の祖母はその力強い手で布団を仕立てていた。
打ち直しはしているが、私は生まれてからずっと祖母の布団で寝ている。

父方の祖母が営む寝具店にはきれいな布団等の生地がたくさんあった。
祖母から貰った生地で母方の祖母がいり糠入りの針刺しを作ってくれた。
小学校で家庭科の授業が始まるよりも前に作ってもらった針刺しでこれまでいろいろなものを作って楽しんできた。

どちらの祖母も私たちが香川に帰ると必ずうどんを用意してくれた。
香川でのおもてなしだ。
この夏も母のきょうだいとその家族が集まり、大勢で手打ちうどんを味わい、墓参りをした。

親戚が集まる賑やかな時間が夏の楽しみだった。
祖母は前日の夜にはうどんのだし（つゆのことをだしと言う）作りに取りかかる。
祖父は朝早くから仕込みをしてうどんを打つ。
打ち終えたうどんは、祖母がおくどさん（竈）で茹でる。

自分が成長するに連れ、その日のために祖父母が随分前から段取りをしていることに気付いた。
だし用の干し椎茸用の椎茸や薬味のねぎを育てることもその一つだ。
楽しみにしているすいかもお盆に一番おいしくなるよう工夫して育ててくれていた。

今は、祖父と一緒にうどん作りを切り盛りしていた叔父が中心になっている。
食材はスーパーで購入し、おくどさんは 2 代目、麺切り機が大活躍だ。
役割やものが少しずつ変わっても皆で過ごす時間は変わらない。
とてもしあわせなことだと思う。

日本各地に迎えてくれる友達がいて、それぞれの思い出がある。
出身地はどこかと聞かれると悩んでしまうが、私にとってだしは「いりこ」、お雑煮は「餡入り丸餅の白味噌仕立て」、冬の楽しみは香川の郷土料理「まんばのけんちゃん」だ。

祖父母と過ごした時と暮らしは変わりつつあるが、祖父母がいろいろな形で教えてくれたことが今の私につながっている。
祖父母に変わって、両親、親戚が私と香川をつなぎ続けてくれていることを大切にしていきたい。

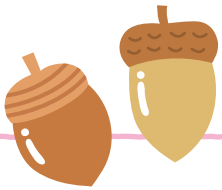
私と祖父母

県立高校　家庭科　相浦知子

核家族で育った私は、祖父母と年に数回会う程度で、挨拶程度の話しかしませんでした。私の大学時代、ワンピースの被服製作課題があり、布地を一緒に選びに行こうと祖母に言われ、戸惑ったことがあります。祖母にとって孫は 15 人もいて、なぜ私と一緒に行こうと思ったのかは聞けませんでした。その後買い物に一緒に行ったのか、どんな会話をしたのかは覚えていません。

前任の高校で家庭総合の学習後、3 年生の文系科目として「ライフプランニング」という家庭科の学校設定科目をつくりました。その中で地域の高齢者とお話しをする「人生の先輩に学ぶ」という授業を実践しました。生徒 1 グループ（4 ～ 8 人程度）に高齢者 1 人ずつ入り、今までの仕事や家庭生活のことを語ってもらいます。生徒には事前に質問を考えさせますが、途中「奥さんとどう知り合ったのですか？」「家事分担はどうしていました？」など、考えていた質問以外の方向に話が行くことがあります。聞き耳を立てていると、「初恋だったのだよ」「二人で力を合わせたよ」など実感のこもったお答えがあり、終了後生徒から「自分の祖父母に聞けないことを聞けた」、「時間が足りなかった、もっと話したかった」など楽しんだ様子が見られました。自分の祖父母には聞けないような人生の出来事、生きてきた背景、現在の生活や健康面、人生の先輩からの学びは多く深いと感じます。

結局私は、自分の祖父母に直接人生の出来事の話を聞くことはありませんでした。後に、祖母は和洋裁縫女学院で学んでいたと知り、祖母にとって布地選びは楽しみだったのではないかと気づきました。祖母の口から女学生の頃のこと、祖父との恋愛や子育てなど、もっともっと聞いておけばよかったと今になって思います。



わたしと祖父母

全国家庭科教育協会　浅井直美

祖父母との想い出を書くという機会を頂き、とてもうれしく思います。まさか自分たちのことが紹介されるとは、亡くなった祖父母も驚いていることでしょう。10 歳のころまで島根県松江市で同居していた父方の祖父母について紹介します。

祖父は明治 30（1897）年生まれで 93 歳まで生きました。船大工をしていたようで、老後にも、自宅玄関先で船を造り、宍道湖で子供や孫をのせて遊ばせてくれました。船を造ったのは 1 回だけでしたが、様々なものを手作りしていました。今でも、竹をガスの火であぶって柔らかくして曲げて作った「孫の手」は愛用品です。ものづくり好きの私のルーツかもしれません。

祖母は、明治 33（1900）年生まれで、103 歳になるまで長生きをしました。私が幼稚園年長の時、東京と横浜在住の息子と娘に会いに行く旅行に連れて行ってくれました。しかも寝台特急「出雲」の旅で、あの狭い寝台列車に二人で寝て往復したのです！！祖母 67 歳くらいのことです。叔父や叔母に、「あの時東京に行ったから、直ちゃんは東京に住んだのかもね。」と言われています。

そして、祖母と言ったら「にぎにぎ飯」です。手に塩をつけて一口大に握った単なる塩握りなのですが、そのおいしさは忘れられません。親に怒られてふて寝をした後など、お腹が空いたというと作ってくれました。お腹を満たすとともに気持ちを満たしてくれていたのだと思います。自分の娘にも、塩握りをよく作って食べさせました。娘は、いまだに「お母さんの塩握り食べたい」というくらいです。

振り返ってみると無条件の愛を祖父母にいただいたと感じます。自分自身、根拠のない自信をもてたのは、もしかすると幼少期にいただいたこの愛情があったからではないかと思います。
長い間中学校に勤務し、トラブルを抱える生徒の多くにはそれが足りないように感じたことがあるからです。

直接の恩返しはあまりできなかったけれど、祖父母に負けないくらい長生きをしてこれからの人生を楽しんでいくことで祖父母も喜んでくれるのではないかと思います。
「おじいちゃん　おばあちゃん　かわいがってくれて本当にありがとう。
直美は楽しく元気にやっていまーす！」

わたしと祖父母

木更津市立岩根中学校　淡路倫子

私はおばあちゃんっ子でした。祖母を思い出すと、いつも優しくふんわりした気持ちになります。それと同時に、祖母の生き方は、人への畏敬の念を思い起こさせるものがあると感じています。

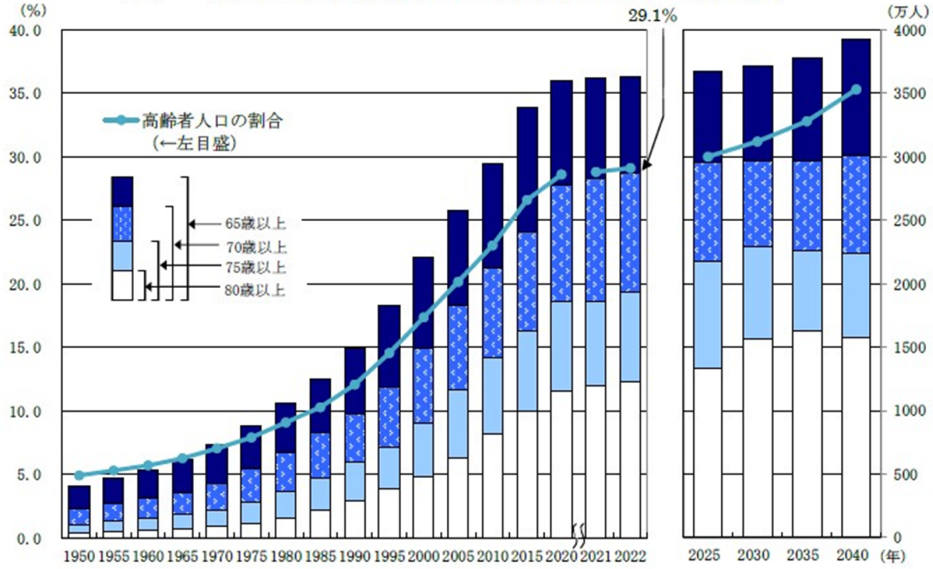
私が生まれた第二次ベビーブームの日本は、高度経済成長のまっただ中でした。時代は「男は仕事、女は家庭」でしたが、シングルマザーであった母は、地方で小さい会社を営んでいた祖父の元で働いていたため、私は祖母に育てられました。祖母がご飯を作っている足下で、できたてのおかずを一口もらうことが大好きでした。お風呂も祖母と一緒に入り、体を洗ってもらった後に、祖母と一緒に私の歳の数を数えてお風呂から上がりました。体を拭いてくれるのはもちろん祖母です。

祖母は若くして重度のリウマチに罹患していましたが、幸い関節の固まりもなく、運動機能は損なわれなかったので、幼い私の世話や家族の食事を作ることなどの日常活動はできていました。ただ、寝る前には病気を労って祖父が買ってくれたというベッドに腰掛け、痛みがある部分に湿布を貼っていた姿を毎晩見かけました。「おばあちゃん大丈夫かな。」と思いましたが、幼いながらも「子供の私が口を出すことでもないのかな。」と遠慮して、そっと自分の部屋に向かいました。

私自身は、幼いながらも「身の回りの世話をしてもらっている自分」と、それとは反対の気持ちとして「体の悪いおばあちゃんを助けたい自分」を感じていたように思います。

高齢者人口は、昭和 47 年版厚生白書では 7.1%、令和 4 年度総務省人口推計では過去最高の 29.0%となりました。この 50 年で、日本の社会環境は少子高齢化や人口減少、高齢者人口割合の増加など、急速に変化しています。2040 年には、高齢者人口は 35%となる予想が立てられており、人口減少・高齢化率の上昇は、私たちが暮らす地域全体が直面する課題となっています。

図１　高齢者人口及び割合の推移（1950年～2040年）



出典：総務省統計局HP「統計トピックスNo.132 統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで－」

現行の中学校学習指導要領では、「高齢者など地域の人々と協働」することが明記されています。現代の社会情勢を鑑み、これからの高齢者学習の一つ目の観点は、高齢者の心身の老化についての理解を促し、中学生でも支える側になれることに気づかせることが必要だということがあげられます。私の身近な中学校の現場では、どのように高齢者学習を進めるか、それぞれ先生方がアイディアを持ち寄り、工夫を凝らして取り組んでいます。しかし、実践が足りていない現状であり、まだ研究段階にあると言えます。とはいえ、地域の高齢者を招いた学習会や高齢者施設訪問など、「幼児の生活」の題材で培ったノウハウの活用も可能な部分もあります。また、高齢者疑似体験キットを活用した高齢者体験なども有効な学習です。まずはそれらの学習活動を通して、高齢者の生活を知ることが大切だと考えています。

二つ目の観点は「協働」です。高齢者学習を進める中で、当初の生徒の感想は「高齢者は労るべき存在」というものが多いです。授業の導入として、高齢者の身体的な特徴、高齢者の家庭内事故などを知る学習を行うからです。しかし学習が進むにつれ、また、施設訪問や地域の生活などで高齢者と触れあうことにより「高齢者から学ぶことが多い」「おばあちゃんの知恵袋的な尊敬する点があった」「たくさんおしゃべりをしてくれて元気いっぱい」など、高齢者へのイメージが変化し新たな視点で高齢者を見つめた感想が出てきます。このように、老年期にある方々を「人生の先輩」として敬うことが、「高齢者など地域の人々との協働」の意味を持つと考えています。このことは、看護学でいう「ケアリング理論」に該当するものだと思います。今後はケアリング理論を取り入れた家庭科学習を実践し、授業を検証してみたいと考えています。介護体験を行って中学生が一方的にお世話をすることのみを学習とするのではなく、高齢者を長い人生を生きてきた先輩として敬いながら、互いに持っているものを共有する、分け合うことで「協働」する関係性の構築を目指した授業を作っていけたらと思います。

体が不自由ながらも自分の人生を生き、家庭に根を張って生活していた祖母の生き方を尊敬しています。そして今は、私の母も同じように孫たちの世話をしています。孫たちには、母の姿はどのように映っているのでしょうか。聞いてみたいです。

祖母との生活の中で、身の回りの世話をしてもらっていた私が抱いていた「おばあちゃんを助けたい」という思いは、幼いながらも「家庭内で何か（誰か）の役に立ちたい」という思いです。それが、他者を尊重しつつ互いに認め合う者同士の成長につながる結びつきであるケアリングの一部分であったのでしょう。
祖母の生き方を間近で感じられた経験が教材研究に生かされていると感じます。今後も研究を重ね、家庭科という教科から、生徒が自らの生き方を考えられる授業づくりをしていきたいと思います。

寄稿にあたり、エビデンスもない私的な経験を元に、つたない文章をつらつらと綴りました。このような機会を与えていただきありがとうございました。読んでいただいた会員の皆様に感謝いたします。今後も家庭科教育研究所の皆様と共によりよい授業作りに取り組んでいきたいと思っています。
ありがとうございました。

編集後記

先日、“この頃しばらく研究所ニュースが送られてきませんね”と声をかけていただきました。確かにそうです。前号の挨拶に“桜便りも届き始めました”と書いていますから、あっという間の半年ぶりです。ニュースは会員のみなさんの交流の場、大切に、継続していきたいと改めて思いました。

本号は、たくさんの会員の方々に寄稿していただき、ほんとうに充実した内容になりました。寄せていただいた文章を読みながら、書いてくださったみなさんを思い浮かべながら、私も文章の中のおじいちゃんおばあちゃんと会っているような不思議な気持ちに満たされました。
手作りのおうどん、塩握り、孫の手、一緒に過ごした時間、お風呂でのこと、ワンピースの布地を一緒に選んだこと、おじいちゃんの和裁、だしの味、自分たちの訪問に合わせて、自家栽培の果物や野菜がいちばん美味しくなるように工夫し、段取りをしてくれていたおじいちゃんおばあちゃん、寝台特急での2人旅、……何度も読み返してみたいことばかりです。

「人生100年時代」といわれる今日、こういう世代の繋がりの重要性も益々大きくなっていくものと思います。上村先生の言葉を借りると「生ー老ー死」をつなぐ視点ということになるかもしれません。寄稿文を読みながら、血縁関係に限定しないより広い捉え方での、人間が持つ「世代」としての祖父母―孫の繋がり、ここに豊かな人生の鍵があるような気がしています。

編集　工藤由貴子